国体を機に競技を始めました。最初、周囲は「カヌーって何？」という反応。今は会社からカヌーを提供してもらうなど、応援してもらっています。よくやるなと自分で思うこともありますが、世界で戦うトップ選手と一緒に練習できたり、自分の努力の分だけ成果を感じることができたりと、楽しんでいます。競技人口拡大のためにも競技場を維持してもらいたいですし、川下りなどで活用してほしいです。続けられる限り、カヌー競技を続けていきます！

岩渕 政浩 選手（35）

ボランティアで競技場の草刈りをしています。他にはない優れた点のある競技場の活用で、地域が活性化してくれれば。これからも協力していきたいです。

市建設業協会胆沢支部
佐々木 利幸 支部長（61）

競技場の管理運営は、全国的に見ても１番。ここのように地域を挙げて盛り上げてくれる大会はどこにもないです。まだまだ競技人口の少ないカヌー競技。トップ選手にどんどん来てもらい、にぎやかになってほしいですね。

県カヌー協会
田屋 巧 副理事長（51）

競技場の歩み

平成28年の希望郷いわて国体でのカヌー競技（ワイルドウォーター、スラローム）の開催に向けて、競技場の候補地を模索していた岩手県と県カヌー協会。２種目を実施できる条件の良いカヌー競技場を整備することは難しく、これまでの他県の国体でも県外開催を余儀なくされたことは珍しくありません。県内で開催できるかどうかは、県にとって大きな課題でした。そんななか、白羽の矢が立ったのが胆沢川でした。競技の実施には安定した水量が必要で、25年度の完成を控える胆沢ダムの存在は、大きなカギでした。

カヌー競技場の建設は前例も少なく、設計は難航します。それでも、ダム直下という特殊な土地への建設ながらダム管理事務所の全面的な協力を得て、26年9月に着工。途中、大雪の影響などで工事に遅れが生じたものの、27年6月に完成となり、無事に岩手県民大会で初使用され、その翌月には国体リハーサル大会の開催を迎えることができました。

同競技場は関係者から高く評価され、多数の選手が練習でも利用。（公社）日本カヌー連盟による海外への情報発信などもあり、海外選手による合宿なども行われているほか、国際大会などの大きな大会の開催も期待されています。

その他にも、胆沢ダムフェスティバルでのラフティングの開催や消防署のレスキュー訓練、いわて流域ネットワーキングによるレスキュー３の講習会会場などにも利用され、カヌー以外での活用も進んでいます。

カヌーが開く未来

希望郷いわて国体では羽根田卓也選手が来場した効果もあってか、周辺道路が渋滞するほどの来場者がありカヌー競技の開催は成功を収めました。国体を終えても、市と市民によるカヌー競技場を活用したまちづくりは終わりません。ことし7月には「胆沢川特設カヌー競技場」という建設時の名称を「奥州いさわカヌー競技場」へと変更し、更なる競技場の活用を目指しています。

活用策の一つであり今回開催されたジャパンカップでは、すでに2020年までの開催を予定しています。今大会では、地元事業者による出店のほか、胆沢区地区振興会連絡協議会にのぼり旗の設置や会場でのおふるまいの協力をいただくなど、地域を挙げた取り組みで大会を盛り上げました。関係者からもこれだけにぎやかな大会はほかにないと好評。運営なども高く評価され、カヌーのまちとして本市の名を上げる結果となっています。

一般的に、カヌー競技に必要な水量を確保するためには水量調整が必要ですが、常時毎秒18㌧の流量を持つ同競技場では、その必要がほとんどなく、練習場としても有望視されています。トップ選手が、大会だけでなく練習でも、本市を訪れることが期待され、実際に23歳以下の日本代表選手が世界選手権に向け合宿をしています。選手との交流も行われており、7月30日には小学生がオリンピックに出場した矢澤一輝選手とともにカヌーを体験しました。

市民が中心となった活動も進んでいます。審判員講習会の受講生などが28年3月に「奥州カヌー愛好会（石川善一会長）」を設立。胆沢ダム直下の馬留池でのカヌー体験会の開催や、いわて流域ネットワーキングと協力して奥州湖レイクツーリングやラフティング体験会などの開催、みちのくひめかゆカップの主催も行うなど、カヌー競技のすそ野を広げ続けています。今も積極的な活動で、競技場や胆沢ダムなどの魅力も発信し続けています。

今後、東京オリンピックの開催に伴い、同競技場の注目度が高まることが期待されます。市は更なる競技場の活用により、市の交流人口の増加やカヌー競技の振興に努め、地域を盛り上げてまいります。